



籠城戦の最中、城内から唐人凧が揚がったことがあります。本来凧は、喧嘩凧で、春に挙げたものです。この凧を見た会津藩士は、勇気づけられたのです。」



道明寺粉を入れていた「干飯(ほしい)櫓」

## 女性たちの籠城戦

籠城戦は、悲惨で耐え難いものであったことが、次の女性たちの記録から伺えます。

山川操子『十七歳にて会津籠城中に実験せし苦心』(山川健次郎の姉) 『明治天皇フランス語通訳』から

銃も環のついた旧式のもので、環のついた銃さえなくなりましたので、ごく昔風の火縄銃を使っております。

米俵からお湯の中へざあとあけて、それをただ掻きまわすだけでございます。(その後)道明寺粉(粥)を食べさせられました。

何年間貯えてあったかわからぬほどふるいものでございます。裸虫のようなものがたくさん入っておりますので、それを一つ一つつまみ出して捨てては食べました。

母は、お姫様が自害をあそばしたら、すぐに二人の妹を刺殺して自分も死ぬ覚悟でおりましたそうです。いざとなったら城に火をかけるつもりで、薪をたくさん籠に入れて用意しておきました。

開城になって、城の外へ出てみますと、河には死骸が流れている。首が落ちていて、血が流れているという恐ろしい有様でございました。(開城後) 私どもは皆、在方へお預けになりました。

主君のためには水火をも辞さぬという忠義の心から出た戦でございます。

### 酒井たかこ『籠城中の思ひ出』より

九月十四日、御時計の間(本丸の中央部)であったか、そこへ砲弾片が飛んで来て、まづ私の母の後頭部に入り、髪まじりの脳味噌が、その間一杯に散り、次に高木様の奥様の後頭部をもぎ取り、大河原源八の女の胸にも入り

ました。

負傷者の加わるに、繃帯の不足を生じたので、大書院の縁の下に捨てた血や膿のついた繃帯を御馬場で大桶に水を汲んで、足で踏んで洗うことは、大変難渋の仕事でありました。

山本八重子『男装して会津城に入りたる当時の苦心』より

私は着物もすべて男装して、麻の草履を履き、両刀をたばさんと、元籠七連発銃(スヘンサー)銃、重さ三八五キロを肩に担いでまいりました。両刀と鉄砲と草履とは当時の形見でございます。

御婦人などは、白無垢に生々しい血潮の滴っているのを着ておられました。

女の役目は、兵糧を炊くこと、弾丸を作る(一日一万発を作りました)こと、負傷者の看護することの三つ。

一番心配でたまりませんでしたのは、廁に入っている時でございました。もし廁に入っております時、最後を遂げました時は、婦人として最も恥ずべき醜態を曝さなければならぬからでございます。

水の中に落ちた御飯も捨てるどころではございません。それは後でお粥にして負傷者にたばせました。黒く焦げたところや、土に落ちて兵糧にならぬところは、私ども女たちがいただいております。

九月十四日、一日に一二〇八発あったということでした。音が聞こえると黒い点を打つて、数えたのだそうです。昼夜をとおしては二五〇〇有余発(本乗丸月見櫓で数える)を算したそうであります。

(晩、廊下を歩いていると)寝ていると思ったのは、死んでいるので、戦死者の死骸の置場がないものですから、仮に廊下に並べておいたのでございました。

